



# 京都大学 総合人間学部 広報

## 特集 2008年度 総人ゼミを終えて

総人ゼミ「シャーロック・ホームズの論理学」	高崎 金久	2
2008年度「総人ゼミ」の経験	西井 正弘	3
終わらない「古典ギリシア語に親しむ」ゼミ	高谷 修	5
ねえ みんな、初めてだよねえ	堀 智孝	6
総人ゼミ報告書—ガラスに魅せられて— 2008	田部勢津久	8

## ご退任を迎えられる先生から

あっという間の19年間	鈴木 雅之	9
-------------	-------	---

## 新任教員より

新任のご挨拶	大倉 得史	11
--------	-------	----

## 特集 2008 年度 総人ゼミを終えて

### 総人ゼミ 「シャーロック・ホームズの論理学」

高崎 金久 (認知情報学系)



この冗談のようなゼミ名はじつはまじめなもので、ゼミのテキストである内井惣七『シャーロック・ホームズの推理学』（講談社新書）の書名にちなんでいる。総合知を

めざす総人の学生ならばこのようなゼミ名をおもしろがるだろうと期待したが、残念ながら参加者はたった2名だった。しかし、人数が少ない分、じっくりと時間をかけて学んでもらうことができたと思う。

テキストのテーマは19世紀後半の英国で展開された科学方法論であり、このテーマを同時代のコナン・ドイルの探偵小説を題材にして解説している。自然科学では、観察や実験に基づいて仮説を立てて、それを再び観察や実験によって検証する、という形をとることが多い。この前半の部分ではさまざまな発見の方法が駆使されるわけだが、後半の部分も数学の証明と違って100%の正しさは望めない。なぜなら、形式論理的に見れば、自然科学における仮説検証は「仮説Aが正しいならば現象Bが観察される」という理論的予言と「現象Bが観察された」という事実から「仮説Aが正しい」ということを結論づけるものだからである。このようにA→BとBからAを結論するような(100%正しいものではない)論理を「帰納論理」という。これに対してA→BとAからBを結論す

るような100%正しい推論のみに基づく論理を「演繹論理」という。数学の証明は100%の正しさが保証される演繹論理であるが、自然科学では帰納論理が避けられない。したがって帰納論理的な検証方法の信頼性が問題になるが、この問題は確率論や統計学と密接に関係する。『シャーロック・ホームズの推理学』はホームズの推理の事例やホームズが折に触れて表明する見解を巧みに(ときには強引に)引用しながらこのような科学方法論の諸問題を解説している。

ゼミでは、参加者がこのテキストを読んで内容を紹介する、というオーソドックスな講読を行った。さらに、ある程度読み進んだ段階で、同じ筆者の『科学哲学入門』（世界思想社）でもう少し詳しい内容を紹介したり、帰納論理の確率論的裏付けを米国のマグローウ・ヒル大学演習シリーズの翻訳『現代論理学 (I)、(II)』（オーム社）で学んだ。

(たかさき かねひさ)

## 2008年度「総人ゼミ」の経験

西井 正弘 (国際文明学系)



大学に入学して半年、高校までの環境とは異なる「自由な空間」で、自分をどのように処していけばよいのかまだ見つけられない人もいるのではないだろうか。入学直後の

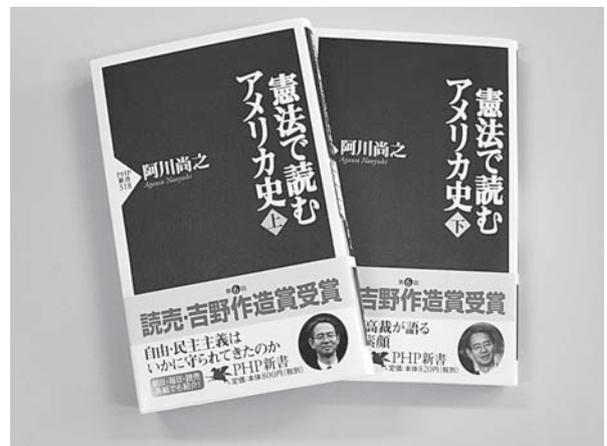
高揚した気分を忘れ、今やアルバイトやサークル活動に忙しく日々を過ごしているかもしれない。大学とは何をどのように学ぶ所なのだろう。講義やゼミに出席していれば「勉強」している気持ちにはなるかもしれない。でも何か違う。本当に自分が知りたいことは何だろう。知らない言葉や知らない学問分野が多過ぎる。あれも知りたい、これも勉強してみたい。でも、どうやって取り組みば？

そんな学生を対象に平成19年(2007年)後期から、総合人間学部導入されたのが、「総人ゼミ」である。2007年、2008年とゼミを担当した。初年度のゼミの名称を「戦略なき外交を考える—1991年湾岸戦争の教訓」とし、私の専門とする国際法とは異なる「外交」を検討対象とした。ゼミ内容は、日本外交の「敗北」「転換点」とも言われ、トラウマともなった1990～91年の湾岸危機・湾岸戦争を扱う手嶋龍一著『外交敗戦—130億ドルは砂に消えた—』新潮文庫、2006年(旧書名『一九九一年日本の敗北』(新潮社、1993年;新潮文庫、1996年))をテキストとして、政治家、外交官、官僚の役割と問題点を探り、危機における人間の知恵と勇気を学ぼうというものであった。熱心な学生8名(内

1人は法学部生)の参加のもと、学生たちの生まれた頃の事件を調べ、議論する活発なゼミとなった。

2年目の2008年度のゼミでも、あえて専門外の「アメリカ憲法史」をテーマとして選んだ。具体的には、阿川尚之著『憲法で読むアメリカ史』(上・下)PHP新書、2004年をテキストとした。学生の質問の全てには私は答えられないため、学生は自分で調べて来なければならない。参加者は4名(内2名は法学部生)で、本来「総人ゼミ」の対象として想定した総合人間学部1回生の参加が少なかったのは残念だった。解らないことは、まず自分で調べることとし、可能ならば専門の先生方、アメリカ現代史の島田真杉先生(現名誉教授)やアメリカ憲法学の見平典先生にも、レクチャーをしていただこうと、学生に伝えてスタートすることとした。

木曜日の6時限をこのゼミに充てたが、会議が長引いて、実施できない日もあった。幸い「単位のないゼミ」なので、10月23日から開始し、1月



9日の最終回まで計9回で、全31章600頁余りを読み通すことができた。この総人ゼミを通じて新しく得た知識を基に、いろいろな分野の学問に興味関心をもってくれることを期待したい。

2009年1月末日には、1泊2日で、長浜市と近江八幡市を目的地とする「総人ゼミ研修合宿」を行なった。2008年度初めに大学院人間・環境学研究所と協定を締結した長浜市の曳山記念館において、市の職員の方から、長浜市に関する講義を受け、夜には、宿の「休暇村近江八幡」で、元木泰雄教授から、湖東地方の近世史における位置づけについて、有意義な講演をしていただいた。八木隆事務長は2年連続の合宿参加で、学生からも平素知り合う機会のない教職員を身近に感じることができたと好評であった。総合人間学部は、多彩な分野の先生方によって構成されているが、日常的には、限られた範囲の人と場所の中で、学生は動いているに過ぎない。開講された15科目のゼミ担当の先生全員の参加とはならなかったが、教職員と学生が一堂に会し、議論する場が持てたことを、うれしく思う。

本2009年度は、総人ゼミの発足から3年目である。総人ゼミの在り方を検討すべき時期にきているのかもしれない。私は、「単位」の問題と「初年次教育」としてどのように位置づけられるかの問題が重要であると考え。第1の「単位」問題は、2007年度の教務委員会でも議論が分かれた所だが、おそらく全国でもユニークな「単位のない正規のゼミ」として出発をすることとなった。今日、中教審答申でも「単位の実質化」が課題とされているが、この「総人ゼミ」について、所定の開講コマ数の確保や成績評価システムの構築が好ましいかどうか判断が分かれるのではないだろうか。あるいは、卒業に必要な単位とは看做されない「増加単位」とする考え方もあろう。第2の初

年次教育としての位置づけについて、総人ゼミを1回生後期に開講する目的が、曖昧なのかもしれない。総人ゼミへの上回生の参加は有意義ではあるが、1回生の参加がもっと増えて欲しい。更に望ましいのは、学生が自主的にテーマを決めて、本格的な研究に取り組む「自主ゼミ」や「読書会」を自発的に組織してくれることである。

(にしい まさひろ)

## 終わらない「古典ギリシア語に親しむ」ゼミ

高谷 修 (国際文明学系)



総人ゼミの一つとして「古典ギリシア語に親しむ」を開講しようと思いついたのは、新入生の皆さんに古典ギリシア語に親しむ機会を提供したいと思ってのことでした。

ギリシアの叙事詩やギリシア悲劇の中には、心に残る名句が沢山存在します。ホメーロスの一節やアイスキュロスやソフォクレスの台詞などギリシア語の名句を、たとえ断片ではあっても、鑑賞し味わって貰うことで、学生諸君の中に古典ギリシア語への興味を喚起したい、そして、もしも出来るならば、ギリシア語ギリシア文学へのチチェローネに自分になりたい、そのような思いから「古典ギリシア語に親しむ」ゼミを構想しました。このような、いささか不遜な思いを抱いて開講日を迎えましたが、受講希望者は残念なことに、誰もいませんでした。

失望の念を禁じえませんでした、そんな時に一人の学生が現れました。それは4回生のK君でした。彼は知らない学生ではありません。以前演習の時間にホラーティウスの『歌章』やウェルギリウスの『アエネーイス』を一緒に読んだことがあり、またダンテの『神曲』は一昨年共々、盆と正月を除いて、読み続けています。優れた語学の才能を持った学生ですが、彼の望みは、ダンテやウェルギリウスを読んだので次には時代を遡って古代ギリシアの叙事詩を読みたい、というものでした。このような申し出はこちらとしても歓迎

するところでした。幸か不幸かゼミの参加者はK君一人です。急遽方針を転換して、まずギリシア語文法をキチンと学習することにしました。テキストは、多少問題があるにせよ京大では定番ともいべき田中美知太郎・松平千秋著『ギリシア語入門』(岩波全書)を選びました。こうして二人だけのギリシア語学習が始まりました。ローマの初代皇帝アウグストゥスは「ゆっくりと急げ *σπεῦδε βραδέως*」を座右の銘としていましたが — この格言はラテン語 *festina lente* の方でよく知られているでしょう — われわれもこれをモットーにギリシア語の学習を続けました。「急ぐ」よりも「ゆっくり」の方に比重があった嫌いはありますが、それでも文法学習はそろそろ終わりに近づいてきました。総人ゼミという枠からは少しはみ出すことになりましたが、ともあれ、近いうちにK君と一緒に『イーリアス』を読むことが出来そうです。今はその日を楽しみにしています。

(たかや おさむ)

## ねえ みんな、初めてだよねえ

堀 智孝 (自然科学系)



千葉知世さんは総人で国際文明学を専攻した。彼女はまた、この春の卒業式で総人の代表をつとめた人でもある。毎年総人は、10学部のトップを

切って総長から学位記を受けるので、総人の代表は栄誉であると同時にかなりの緊張を伴うものである。わびすけ椿の白花を想わせる振り袖に、蘇芳色の袴をまとった千葉さんは、みやこメッセの大ホールを埋め尽くした卒業生とその家族併せて五千余人の前で、テレビと新聞のカメラに追われながら、代表の役目を立派に果たしていた。

卒業式のあと、千葉さんは吉田南キャンパスにとって返し、総人卒業生131人に混じって学部長から学位記を伝達されたのであるが、彼女はまたこの会場で卒業生代表としての記念スピーチを求められた。そして彼女は同僚に向かって、“ねえ みんな、この中の多くのひととわたしは、今日出会うのが、初めてだよねえ”と切り出した。同僚たちはみなみな笑顔を作って“そうだ、そうだ”と応えていた。その後、千葉さんは言葉を継いで、“私は格別にスピーチの準備をしていないので・・・”と謙虚な前置きをしながらも、総人の4年間と将来の計画を若々しく語りかけ、華やかさの中で凛としたスピーチを終えた。

その前日、総人の学部長は、はからずも記念スピーチのことを小耳に挟み、彼はいつもの悪戯ごころから、花屋に頼んで、会場に飾る大きな生花

の束から赤いバラ1本がたやすく抜き取れるように細工して貰っていた。この赤いバラは、記念スピーチへのささやかな謝意(お礼)のつもりであったらしいが、彼は千葉さんの冒頭の一言で前後を見失い、謝意の筈のバラは卒業生への謝意(お詫)に変わっていた。千葉さんが“ねえ みんな”と呼びかけたように、総人の作りに大きな不備があって、学生同士が顔を合わせる仕組みが欠けたままなのである。

総人の理念は、「理科と文科」といった、一見異質とも思える二者の融合が大事であると謳っている。理科を深く極めれば文科に通じるし、またその逆に、文科の真のおもしろさは理科に通底することになる。この融合は総人の魅力の一つではあるが、初学者がこの面白さに触れるには、適切な手ほどきが要るのである。

改善策の一つとして、2年前、新しい形式のゼミが準備された。「総人ゼミ」である。単位は出さない。ゼミ自身のおもしろさでもって学生を誘うのである。既存学問の完成度に気圧されて、“この先はなし”と感じた学生には、是非とも総人ゼミに足を運んで、“これから先へ”を実感して欲しいのである。ゼミに集まる同僚から触発される機会を増やしてほしい。触発されるには、何かを強く意識しすぎてはいけなく、緊張してはいけなく、焦ってはいけなく、しかし、何かを常に求め続けていることが大事である。そして、文系が理系に、理系が文系に接近したとき、互いが触発される確率は、数段高くなる。

ゼミの最終回は、学外で一泊する合同ゼミであ

る。一昨年は、長浜・彦根に向かった。高谷修ゼミ参加者のひとは、「ゼミの感想は？」との問いに答えて、ダンテの神曲を原語で暗誦していた。このゼミ生が将来何を専門分野に選ぶかはわからないが、彼の人生の後半は豊かなものになるだろうとの察しはつく。入試に合格して総人に入学したことへのご褒美だろう。

むかし、「努力しないで出世する法」というコメディをみた。J.レモン演じるその男は、“努力しないで”出世するための新手法をあれこれ、実に愉しそうに工夫するのである。総人が強く求めている卒業論文には、この男の努力にも通じるような工夫が期待されている。ゼミは、こんな工夫やその後の失敗談までもを自慢し合える場である。「総人ゼミ」を活発にして、千葉さんの問いかけに誠意を持って応えたいのである。

(ほり としたか)

#### 2008年度総人ゼミ募集講座

- ・韓国・朝鮮を知る (小倉 紀蔵 (人間科学系))
- ・アンデルセン童話とドイツの伝説——文学研究の方法 (奥田 敏広 (人間科学系))
- ・神経科学入門 (船橋 新太郎 (認知情報学系))
- ・シャーロック・ホームズの論理学 (高崎 金久 (認知情報学系))
- ・神経科学の基礎ゼミ (細川 浩 (認知情報学系))
- ・「ものと心」ゼミ (小林 茂夫 (認知情報学系))
- ・「分子運動医科学ゼミ」がもの足りない人のためのゼミ (林 達也 (認知情報学系))
- ・古典ギリシア語に親しむ (高谷 修 (国際文明学系))
- ・「合衆国憲法」からアメリカを考える (西井 正弘 (国際文明学系))
- ・「グローバリズム」を考える文化人類学読書会 (松村 圭一郎 (文化環境学系))
- ・化学ことはじめ (堀 智孝・山本 行男 (自然科学系))
- ・これからのエネルギー・環境問題を考えよう！—電池・燃料電池について— (内本 喜晴 (自然科学系))
- ・ガラスに魅せられて—2008 (田部 勢津久 (自然科学系))
- ・フィールドに出かけよう No. 2 (杉山 雅人・石川 尚人 (自然科学系))
- ・目でみる生命科学 (竹安 邦夫 (自然科学系))

## 総人ゼミ報告書—ガラスに魅せられて— 2008

田部 勢津久 (自然科学系)

### 授業計画と内容

授業日時：金曜5限

受講定員：3名 実施場所：J515

日常生活であらゆるところに使われながらも透明であるが故に、その存在を忘れられがちな材料。ガラスは、建築、容器、食品などのロウテクから、光を操る素材として、テレビ・ディスプレイ、レーザー、光情報通信、次世代照明蛍光体、コンピュータなどのハイテク部材、さらには美術工芸においても他の具材では実現できない芸術品として活躍しています。その多くは地球上で最も豊かな元素を主成分とし、とりわけビンガラスは、リサイクルシステムをいち早く実現した、親環境の優等生としての一面もあります。歴史的にはその起源をメソポタミア文明にさかのぼり、ヴェネチアやボヘミアで芸術品としての粋を極め、ポルトガル経由でビードロとして日本に伝わり、切り子という独自の工芸品も生まれました。形を変えて今日のハイテク文明を支えるナノガラスとは何か？

本ゼミでは、溶融作成体験を含め、ガラスと光の関わりを総合人間学します。

### ゼミを終えて

2008年後期10月より、上記内容で開講した。実

験設備の都合上、応募人数3名に絞ったところ、女子3名の受講希望者があり、うち2名は文系志望1回生であった。

材料化学的には複雑な物質であるガラス材料について、日常生活で感じる性質が何によるモノであるかという理解を定性的に得てもらうこと、オプトエレクトロニクス等先端光技術で多岐に渡り活躍している素材であることを知って貰うことを目的とした。一方向の講義とは異なり、対話形式で理解して貰うことに注力したため、古典力学、エネルギーの概念、初期量子論、電子軌道、化学結合など高校の物理と化学の基礎について、時間を掛けて、説明するの必要があり、私自身にとっても challenging なゼミであった。対話ゼミだけでなく、研究室所属院生達にも協力をお願いし、ガラス溶融作製や光スペクトル測定を体験して貰うなどの工夫も凝らした。物質科学分野への興味を持って貰えたことと思う(2名の1回生はその後、自然科学系を専攻した模様)。

開講当時4回生であった片山さんには、特に同性である受講生(3名とも)をお世話頂いた。ちなみに下は、今年4月に行った研究室の花見の写真である。前列両端が元受講生である。

(たなべ せつひさ)



## ご退任を迎えられる先生から

### あっという間の19年間

鈴木 雅之 (国際文明学系)



平成2年(1990年)10月に、「西の京」山口(山口大学・人文学部)から教養部に赴任してきました。この度定年を半年前倒して京大を離れることになりましたが、10月赴

任の9月退職ですので、わたしの心の中では、なんとなく19年というひとつのフルサイクルが完成したなという気持ちがないわけではありません。

赴任した当時のことを思い返してみると、まだ教養部時代であり英語教室なるものも残っていました。最終面接を受けるために初めて教養部の校舎の中に足を踏み入れたわたしは、今とは違って「古くて、汚い」(『総合人間学部広報』前号の高橋義人さんエッセイ)建物に何とも言えない学問の香りを感じたこと、面接室前の廊下がとても暗かったのを昨日のここのように鮮明に覚えています。当時の事務助手の方の出迎えを受けて通されたのは、旧英語教室の斜め向かいのこれまたやや薄暗い研究室でした。面接にあられたのは、確か、佐野哲郎先生ともうおひとは田中礼先生でした。人事用に提出していた書類の不備の指摘を受け、またブレイクに関して少し質疑応答があっただけで、比較的短時間にあっけなく終わったこともよく覚えています。

当時の英語教室には、教官(今なら教員)が30数名はおられたのでしょうか。旧英語教室で開かれ

る教室会議なども、今日のように緊急の厳しい問題があるわけではなく、随分とのんびりとした集まりでした。会議というよりは、むしろ、普段会えない同僚の顔を見るためにやってくる、当時の教室会議はそんな風景でした。集まり具合があまりよくはなかったのは、今も昔も変わりません。英語教室構成メンバーがあまりにも多人数なので、わたしが赴任した半年後に定年を迎えられた先生とは、たぶん一度もお話する機会がなかったと思います。そもそもわたしのことを認識しておられたのかさえ疑わしい感じでした。実は、わたしの方も、大勢いた英語教室の先生方すべての名前と顔を、その当初は、認識できていなかったのです。

やがて教養部が改組され総合人間学部となり、わたしは、新しく設置された文化構造論講座に配属、「文化原論」という名の講義を担当する羽目に陥りました。英語教室関係者数名の他には、ドイツ文学そして文化人類学の教員の集まりです。英文学以外の他分野の方との「共生」は、実に刺激的であり、学問(に限りませんが)における「越境性」の重要性を再確認でき、とても貴重でかけがえのない経験でした。総合人間学部の成立事情からいって、文学部と同じことを繰り返すわけにはいきませんでしたので、初めて耳にする講義題目に四苦八苦しなながら講義や学生指導をしました。そのなかで、度肝を抜かれたことが一度ありました。文化原論講義のレポートに、当時3年生のある女子学生が、400字詰め原稿用紙にして400

枚を優に超える大作を提出してきたのです。17世紀西欧で発明された顕微鏡や望遠鏡が、江戸時代の日本にもたらされその後どのように受容されたかを、多量の一次資料を駆使して丹念に論述したもので、修士論文に十分匹敵すると思いました。わたしの受け入れ態勢が十分でなかったこともあり、結局、この女子学生は、紆余曲折を経て上級国家公務員を目指すことになりました。いまでは防衛省に勤務し活躍しています。この学生を通して、京大生のある良質な部分を知りました。その後も、何人もこのような優秀な学生や院生と出会うことができたのは、教師としてとても幸せなことでした。

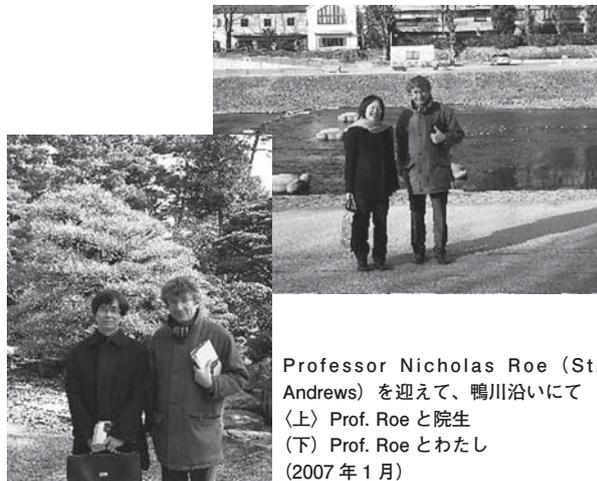
19年の間には、学内および学外委員（長）も幾つか経験しましたが、もっともシンドイ思いをしたのは全学共通科目委員長であり、もっとも楽しんだのは京都大学国際教育プログラム（Kyoto University InterNational Education Program）、KUINEP委員長でしょうか。前者にあっては、学生の巧妙なカンニングに悩まされたことが妙に印象に残っています。後者に関しては、国際交流の重要性は誰もが感じていることですが、京大においてどこまで実践されているかやや疑問符がつきます。国際交流を特化させるのではなく、ごくごく日常的に海外の研究者と交流し論文を書くという風にもっとならないといけないのではないかと

そもそも「国際交流」という言葉はもう古い等々、勝手なことを提案しました。

最後に、総合人間学部広報委員会のことに触れたいと思います。『京大教養部報』から『総合人間学部広報』への移行期で、広報委員会の最初の仕事は、生まれ変わった総合人間学部を内外に知らせる、新しい広報宣伝誌を作ることでした。最初の委員会では誰も委員長の引き受け手がなく、すると当時の学部長木下富雄先生は、「鈴木さん、あなたは最年長だから委員長をやりなさい」と実に言葉巧みにわたしを誘い、それに騙されて結局まとめ役を引き受けることになりました。委員全員の一致した願いは、総合人間学部の魅力と未知の可能性を視覚的に訴えるロゴが欲しいということでした。しかしそのロゴをどのようなものにするか、何回か委員会を重ねました。アイデアのあまり豊富でないわたしは、ありふれたものしか持参できなかったのですが、NASA提供の「月面から見た地球」の写真を、確か委員のひとり酒井敏先生が持ってこられ、皆の意見がまとまりました。併せて『総合人間学部広報』の英文タイトル Integrated Human Studies の書体もあれこれと検討しました。その後、『総合人間学部広報』のサイズなどは変化しましたが、このロゴだけは今日でも変わっていないようで、考案したものとしてはうれしい限りです。

——と、あっという間の19年間でした。

（すずき まさし）



Professor Nicholas Roe (St. Andrews) を迎えて、鴨川沿いにて  
 〈上〉 Prof. Roe と院生  
 〈下〉 Prof. Roe とわたし  
 (2007年1月)



院生と共に  
 白沙村荘・橋本関雪記念館庭にて  
 (2009年9月)

## 新任教員より

### 新任のご挨拶

大倉 得史 (人間科学系)



今年の4月から人間・環境学研究科人間社会論講座に講師として着任しました大倉得史です。総合人間学部の2期生として入学した後、博士課程修了までの10年間にわたっ

てさまざまな教えをいただいた先生方と共に教鞭をとらせていただくことになり、恐縮と感慨の入り混じった不思議な感覚の中、講義の準備に終われる毎日です。5年間、九州の私大に勤めていましたが、学生時代を過ごした懐かしい京都の「ゆったり、ほっこりとした」雰囲気が、そうした切羽詰った気持ちを和らげてくれるのが幸いです。

私の専門は発達心理学です。人間の生涯過程が問題になる学問ですが、特に「自分」を模索してさまざまな揺れ動く青年期の心性と、乳幼児期に世界や自己がいかにして形成されてくるかということに関心を持っています。一見、別々の関心のように見えるかもしれませんが、この両者は深いところでつながっています。すなわち、人間の自己性が言語と身体の複雑な絡み合いのもとで成立している、その発生的メカニズムを明らかにするとともに、そのバランスが動揺している人たち（青年期の人など）に対していかに関わっていったらよいかを考えていこう、というのが私の問題設定です。

このような関心のもと、発達心理学基礎ゼミ

ナールで学生に「自己分析」の作業に取り組んでもらうことを試みています。例えば、自分の基本的対人態度とはどんなものか、それはいつどのように形成されたか、そこにはどんな心理的防衛機制が働いているか、そのような態度を持つことが人生においてどのような意味を持つか、といったことを考えてもらい、他の学生たちとディスカッションをしてもらいます。ほとんどの学生が「そんなことはこれまで改めて考えてみることもなかった」と戸惑いつつも、面白いと言って取り組んでくれます。

実は、前の勤務校でも同じ授業を行っていましたが、「自分」についての意識・関心の高さや、同年代の人たちと「深い」話をしたいという欲求、「自分」を成長させていかねばならないという向上心（強迫？）などは、学力に関わらず現代の多くの学生に共有されているようです。その一方で、根本的な部分での自信（是非はともかく学歴競争に「勝ち抜いた」ことは大きいようです）や、対人関係での激しい波風を避ける術を心得ている点など、「京大生ならでは」のものもあるように感じています。

そんな彼らに対して、どのように関わり、どこを目指して、何を教えていったらよいのか。その明確な答えはまだ分かりませんが、ぼんやりとそれを考えながら、とにもかくにもゆっくりと歩いていきたいと思います。

(おおくら とくし)

<b>I</b>	uman	<b>S</b>
ntegrated	<b>H</b>	tudies

**編集後記**

◆『総合人間学部広報』No.45をお届けします。今回は着任、退任の先生それぞれ一名にごあいさつのお言葉をいただいたのですが、これに加えて「総人ゼミ 2008」の報告を特集としました。残念ながら全ての担当の先生方の原稿をいただくことはできませんでしたが、執筆下さった先生方の文章のはしばしに、このゼミのパラエティ、おもしろさ、いきさつ、ねらい等々がにじみ出ている、極めて興味深い記事になったと自画自賛しております。もとより、これは総人ゼミの総括を企てたものではありません。

執筆下さった全ての先生方に感謝申し上げます。

(K・O)

人間・環境学研究科  
総合人間学部

広報委員会